

平成 30 年 6 月 6 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2017

課題番号：25381029

研究課題名(和文) 咸宜園系譜塾の展開に関する実証的研究 西日本を中心として一

研究課題名(英文) Expanding of private academies established by students of Kangien in western Japan

研究代表者

鈴木 理恵 (SUZUKI, RIE)

広島大学・教育学研究科・教授

研究者番号：80216465

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：咸宜園門人26名による開塾(系譜塾)の事例について資料を収集した。それらのなかでも特に、横井寿一郎の培養舎や柳井竹堂の屏陽義塾の教育活動について詳細に検討してみたところ、咸宜園教育方式(点数評価による実力主義、塾則にもとづく寄宿舎制、漢詩重視)が導入されていたことが明らかとなった。しかし、1880年代に学校教育に対する統制が強化されると、咸宜園でも系譜塾でも、教育方式の特徴は後退した。

研究成果の概要(英文)：26 students who established private academies after studying at Kangien were found. Especially in those, Baiyosya and Heiyo-gijuku introduced the Kangien educational system. However, in the 1880s, government regulation over private schools was tightened and it was no longer possible to maintain this type of education system. Thus, private schools were replaced by public education systems.

研究分野：日本教育史

キーワード：咸宜園 系譜塾 漢学塾 実力主義 点数評価 漢詩教育 蔵書

1. 研究開始当初の背景

咸宜園は、儒者広瀬淡窓によって豊後国日田(現大分県日田市)に開設された漢学塾で、江戸後期から明治期にかけて全国から5000名近くの入門者を集めた。多くの学問塾が一代限りで廃絶していったなかで、咸宜園が塾主を交替しながら明治期まで継続し得た要因として、淡窓の時代に効率的な教育方法を確立したことがあげられる。その特徴としてよく知られるのは、三奪法と月旦評による実力主義教育、厳格な塾則にもとづく寄宿生活、漢詩重視である。こうした独特の咸宜園教育方式は、門人だけでなく、門人を介して時空間を超えて広く影響を及ぼしたと考えられる。

咸宜園は点数評価により「学力」を可視化した。咸宜園方式の教育を受けた門人たちの間では、何級まで達したかによって各々の「学力」が瞬時に了解された。のみならず一般の人びとにとっても、等級＝「学力」が人物を計る基準として通用した。江戸後期に「学力」が広域的、一般的に通用するに至ったことは、近代教育への接続を容易にしたように思われる。

また、咸宜園では厳しい塾則や勉学が課され、寄宿舎での共同的自治生活が重視されたから、門人の生育環境や身分職業の違いを超えて、連帯感や共通感覚が形成・強化されたと考えられる。

淡窓は漢詩を重視し、講義で漢詩集を取り上げるとともに、塾生に漢詩を作ることを奨励し、彼らの漢詩集を出版した。退塾後も門人は自らの漢詩文集を出版した。近世後期から明治期にかけて各地で詩社が隆盛したが、咸宜園門人の果たした役割も大きかったのではないかと考えられる。

門人のなかには帰郷後に咸宜園教育方式を踏襲して開塾した者が少なくなかった。こうした塾を本研究では「咸宜園系譜塾」(以下「系譜塾」と略す)と呼ぶことにする。先述のような咸宜園の独特の教育方法が、系譜塾を通じて、西日本を中心とした各地へ、近世後期から明治期にかけて広がったと予想される。

そこで本研究では、西日本における系譜塾の展開をみることによって、咸宜園の教育方式が、地域的にどのような拡がりをみせ、近世から近代への移行期の社会や教育にどのような影響を及ぼしたのかについて、実証的に明らかにすることを目的とする。咸宜園や系譜塾の門人には明治期の教育・宗教界で活躍した者が少なくなかったと予想され、系譜塾展開の様相を明らかにすることで、咸宜園教育が近代知識人社会に及ぼした影響を浮かび上がらせることができるはずである。

2. 研究の目的

咸宜園の能力主義教育や門人ネットワークが、地域的にどのような拡がりをみせ、近世から近代への移行期の社会や教育にどのような影響を及ぼしたのかについて、西日本における門人の活動に注目して実証的に明らかにすることを本研究の目的とした。具体的には以下の3点である。

(1)西日本に系譜塾がどのように展開したのか、全体像を明らかにする(量的説明)。

咸宜園入門者には西日本の出身者が多かった。本研究では、九州・中国・四国地方と特に入門者数の多い摂津・播磨国(現兵庫県域)を加えた地域(以上の地域を指して「西日本」とする)を対象に、系譜塾の名称・師匠名・門人数・開設期間などを調査し、系譜塾が地域的にどの程度広がっていたのか全体の概要を明らかにする。

(2)具体的に系譜塾を取り上げて精緻な調査研究を行い、教育内容や方法を明らかにする(質的説明)。

系譜塾の史料調査を実施し、それらが咸宜園教育方式をいかに踏襲したかについて具体的かつ詳細に明らかにする。

(3)三亦舎と成美園の門人の社会的活動やネットワークを明らかにする。

咸宜園門人末田重邨が安芸国高宮郡に開いた系譜塾三亦舎や、同塾門人佐々木省吾が開いた成美園の門人が、退塾後にどのような職業に就き、いかなる活動をしたか個人に関して調べたうえで、明治以降の広島県の知識人社会に門人ネットワークがどのようにリンクしたか、その様相を具体的に明らかにする。

3. 研究の方法

本研究では、西日本の系譜塾について量的および質的に説明することを目指した。量的説明のために、西日本各地の県立図書館の郷土資料室において自治体史や郷土人名辞典を閲覧し、文書館等で史料を調査した。それぞれの地域で江戸後期から明治初期にかけて漢学塾や手習塾を開設した人物や明治期の学校教育で主導的な役割を果たした人物に関する情報を収集し、それらのなかには咸宜園門人がいないかどうかを確認した。質的説明のために、開塾していたことが判明している門人の御子孫に依頼して調査を実施し、系譜塾に関する史料を収集した。咸宜園蔵書については、各地の機関に残存する咸宜園蔵書目録を比較対照し、蔵書形成過程を検証した。

本研究期間中、公益財団法人廣瀬資料館を中心に、以下のような諸機関や諸家で史料や文献の調査を実施した。

(1)咸宜園門人や塾蔵書に関する調査機関
中国地方・・・広島県立図書館、広島県立文書

館、岡山県立図書館、岡山県立記録資料館、山口県文書館、山口県立図書館、下関文書館、岩国徴古館、島根県立図書館、鳥取県立図書館

四国地方・・・香川県立図書館、香川県立文書館、徳島県立図書館、徳島県立文書館、高知市立図書館、愛媛県立図書館

九州地方・・・福岡県立図書館、佐賀県立図書館、大分県立図書館、大分県立先哲史料館、熊本県立図書館、宮崎県立図書館、長崎県立歴史文化博物館、鹿児島県立図書館、大分県日田市大原八幡宮大原宮文庫

その他・・・兵庫県立図書館、国立国会図書館、国文学研究資料館、東京都立中央図書館、公益財団法人東洋文庫、早稲田大学図書館、慶應義塾大学図書館、金沢市立玉川図書館

(2)系譜塾等に関する史料調査機関

浅尾藩校集義館・・・岡山県総社市池上家

三亦舎・・・広島県広島市両延神社

修文館・・・福岡県八女市光善寺

蔵春園・・・福岡県豊前市恒遠家、求菩提資料館

水哉園・・・福岡県行橋市村上家（水哉園の塾主村上仏山は咸宜園門人ではないが、咸宜園教育方式を採用していた。）

培養舎・・・大分県上毛郡耶馬溪図書館

屏陽義塾・・・香川県坂出市公益財団法人鎌田共済会郷土博物館、三豊市白井家、三豊市文書館

(3)漢学塾に関して参考とするために、以下の塾跡や諸機関で調査をおこなった。

中国地方・・・広島県福山市廉塾、島根県出雲市明則誠館跡

九州地方・・・大分県速見郡萬里図書館、西嶮精舎跡、豊後高田市史跡涵養学舎跡

その他・・・兵庫県養父市青谿書院資料館

4. 研究成果

上述の具体的な研究目的のうち、(3)については、史料的制約から三亦舎や成美園の門人の退塾後の活動について把握することが困難であったため、達成することはできなかった。いっぽうで、新たな研究課題が見出されたため、当初の研究目的に追加した。本研究では、月旦評による実力主義、厳しい塾則に基づいた寄宿生活、漢詩の重視の3点を咸宜園教育の特徴としてとらえていたが、これらに「蔵書の形成と塾生への提供」を加える必要性が生じた。咸宜園では塾生から蔵書金を徴収して蔵書を形成し、塾生に閲覧させていた。大規模塾ならではの特徴といえる。このため、咸宜園での蔵書形成について明らかにする必要に迫られ、これを新たな研究目的に設定した。

(1)系譜塾の量的把握

咸宜園門人26名による開塾、藩校の教師と

なった13名、さらに系譜塾門人6名による開塾の事例を確認できた。咸宜園教育研究センターで明らかにされている事例（咸宜園教育研究センター監修『図説咸宜園 近世最大の私塾』日田市教育委員会、2017年）とあわせると、九州地方で約70、中国・四国地方で20近くを確認できたことになる。藩校教師となった事例についてはこれまでほとんど注目されてこなかったが、本研究では、咸宜園の独特の教育方法が、門人によって藩校にも導入された可能性に注目した。特に、周防・長門国（現在の山口県域）出身の咸宜園門人には、帰郷後に藩校や郷校の教師になった者が比較的多い傾向がある。防長両国には、萩毛利本家の宗藩と、その末家である長府・徳山・清末の各毛利家および岩国吉川家の四支藩があったが、萩に藩校として明倫館が設けられたほか、支藩にも敬業館（長府藩）、育英館（清末藩）、鳴鳳館のち興讓館（徳山藩）、養老館（岩国藩）があった。また、宗家萩毛利家の一門八家においても、徳修館（三丘戸家）、弘道館（大野毛利家）、時観園 学文堂・本教館（右田毛利家）、憲章館（吉敷毛利家）、朝陽館（厚狭毛利家）、時習館（阿川毛利家）、育英館（家老益田家）、晩成堂 菁莪堂・維新館（家老福原家）などの家臣教育のための学館が設置されていた。これらのなかには、咸宜園門人が教師を勤めた場合がある。長州藩は、山県周南が明倫館に徂徠学を導入して以来、「西日本における徂徠学的一大拠点」（牛見真博『長州藩教育の源流 徂徠学者・山県周南と藩校明倫館』溪水社、2013年、まえがき 頁）となったといわれる。防長の藩校や郷校の教師に亀井塾や咸宜園に学んだ者が多かったのは、そうしたことを背景としたものではないかと考えられるが、その検証については今後の課題としたい。

(2)系譜塾の質的把握

本研究では、培養舎と屏陽義塾という2つの系譜塾に注目し、詳細を明らかにした。

培養舎は、咸宜園門人の横井寿一郎によって豊前国下毛郡永添村に創設され、同郡萱津町に移された漢学塾である（永添村・萱津町のいずれも現大分県中津市）。元治2年（1865）から明治3年（1870）まで続いた。その間に確認できる塾生総数は146名である。永添村では、従来であれば咸宜園に入塾していたような近隣寺院の僧侶や地域指導者層の子弟を受け入れて漢学教授をおこなった。明治2年、寿一郎が藩校教授に登用されたのを契機に萱津町に培養舎を移し、下土を受け入れる家塾へと性格を変えた。永添村（私塾）でも萱津町（家塾）でも、咸宜園に倣った点数評価方式を採用していた点では一貫する。少なくとも家塾としての培養舎においては、昇級に必要な定点を満たして余った点数を

次の昇級に活かす方式を採用していた。これは咸宜園や他の系譜塾にはみられない特徴といえる。中津藩士の実情に合わせた窮策であった可能性がある。さらに消権に国学関連書籍を取り入れていたことも注目される。寿一郎自身が国学に関心を持ち、また、渡辺重石丸上京後の後事を託されて、培養舎の性格を変化させたものと考えられる。培養舎の事例から、系譜塾は、単に咸宜園教育方式を踏襲するのではなく、塾生の実態や塾主の事情に合わせて教育の方法や内容を変えていたことがうかがえた（以上の成果は、論文「培養舎の教育活動」にまとめた）。

屏陽義塾は、咸宜園の門人である柳川竹堂によって、讃岐国三野郡上高瀬村（現香川県三豊市高瀬町）に、明治3年（1870）に開設されて同29年（1896）まで続いた漢学塾である。

初期は竹堂近親者が紹介人となって入門者を集め、その入門者が紹介人となってさらなる入門者を呼び込むというかたちで、明治15年（1882）前後に屏陽義塾は隆盛期を迎えた。明治19年（1886）に丸亀に移転した時には讃岐国以外の出身者も入門したことから、門人数が激増した。しかし、それは一時的な現象であった。総体的にみれば、屏陽義塾は三野郡を主とする西讃地方に限定的な塾であった。教育内容も表面的には六学科に分科しつつも実際は経史中心で、教育方法も講釈・輪読・輪講といった旧態依然としたものであった。門人のほとんどは退塾後も出身地域に残って、村政に携わったり、医師として開業したり、実業に就いたりといったかたちで地域指導者として活動した。このように、屏陽義塾は、地域に密着した活動を志向していた住民子弟に対して基礎教養としての漢学を提供する役割を担った。屏陽義塾を咸宜園の系譜塾であるという点からみれば、咸宜園教育方式を導入していたようすがうかがえた。明治13年には咸宜園と同様に試業が行われ、試業が点数評価されていたことを確認できた。明治16年以後については、詩学科を設けてそのなかで『遠思楼詩鈔』を教科書に指定していたことや、東西に分かれた寄宿舎を完備して多くの寄宿生を受け入っていた点、詩・文・書会が設定されたことにも咸宜園の影響が見いだせる。生徒心得が比較的詳細であるのも、咸宜園塾則の影響かもしれない。

しかし、課業や試業で獲得した点数によって毎月の昇級が可能だった咸宜園とは異なり、明治16年以降の屏陽義塾ではあらかじめ定められた期間の修学を必要とした。月旦評や職任制を採用していたことも確認できない。これらのことから、咸宜園系譜塾としての特徴は後退していたとみなさざるを得

ない（以上の成果は、論文「屏陽義塾の教育活動」にまとめた）。

(3) 咸宜園蔵書の形成と塾生への提供

咸宜園では、文政年間以降塾生から毎月蔵書銭を徴収して書籍を購入し、その蓄積の上に淡窓蔵書も加えることで、蔵書数は文久年間には5400冊以上に達した。

蔵書の出納や管理は蔵書監がおこなった。青邨・林外塾主時代には、東家と西家に蔵書が保管され、それぞれに蔵書監が置かれた。蔵書監には優秀な上等生が就いた。蔵書の管理のために、蔵書の架蔵状態に即して書名と本数を記した目録が作成された。蔵書点検の際に目録と書籍を対照して、書籍の紛失が調べられた。目録は、紛失や新規購入などによる蔵書増減に応じて補訂された。

淡窓塾主時代末期から死後直後にかけて作成・校正された蔵書目録を検討したところ、蔵書が東家と西家に分けて保管・管理されていたため、それに即した目録となっていた。しかし、明治7年までに架蔵方法が変わり、和刻本と唐本に分けたうえで、書籍箱に収めた。その過程で、咸宜園蔵書の整理がおこなわれたらしく、一部は広瀬家宗家に移動した。

同年9月に大分県庁に提出された目録では、架蔵箱に付けられた順番に従って記載される形式がとられた。さらに文久3年に死去した旭荘の蔵書目録が塾蔵書の目録とセットにされた。散逸したり東京に移されたり架蔵箱が変更したりして、明治7年の目録と『広瀬家先賢文庫目録』には異同もあるが、基本的には当時の架蔵形式や目録形式は、現在まで継続しているとみなされる（以上の成果は、論文「咸宜園蔵書の形成と管理」にまとめた）。

咸宜園の蔵書目録の主なものとして、年代不明「咸宜園蔵書目録」、安政4年校正「校正東家蔵書目録」、年代不明「咸宜園蔵書目録」、明治7年「咸宜園蔵書目録」、年代不明「咸宜園蔵書目録」、明治17年「咸宜園蔵書目録」、大正5年か「咸宜園蔵書目録」、昭和45年『咸宜園蔵書目録』、平成7年『広瀬先賢文庫目録』があげられる。これらを比較対照したところ、淡窓没後の蔵書を基盤として、幕末の林外塾主時代に数十点の購入がなされ、明治期にも若干の追加がなされて現在に至っている。明治期に散逸した書籍もあるが、概ね、淡窓没後当時の状態が維持されていることが明らかとなった。

咸宜園は5000冊を超える書籍を所蔵し、塾生に閲覧を許可した。また、淡窓は大坂の書肆を介して、講義で使用する『遠思楼詩鈔』やその他の書籍を、塾生のために取り寄せていた（以上の成果は、論文「『遠思楼詩鈔』初編の出版経緯」にまとめた）。咸宜園入門者は全国各地から集まっており、日田は都市

部から離れていたから、こうした配慮は咸宜園塾生にとって便利であったに相違ない。しかし、蔵書の形成と塾生による閲覧という咸宜園の特徴が、系譜塾に取り入れられた事例は確認できない。たとえば、末田重邨が安芸国高宮郡に開いた三亦舎のある塾生は、実家や知人に書籍入手を依頼せざるをえなかった（鈴木理恵「近世末期芸州の漢学塾を介した書籍貸借 ―塾生を中心に―」、『長崎大学教育学部社会科学論叢』63、2003年）。

以上の成果を、論文として発表するとともに、最終的に、報告書『咸宜園系譜塾の展開に関する実証的研究 西日本を中心として』にまとめて発行した。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計5件）

鈴木理恵「培養舎の教育活動」『教育学研究紀要』（CD-ROM版）第63巻、査読無、2018年、pp.133-138

鈴木理恵「屏陽義塾の教育活動」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第三部66号、査読無、2017年、pp.198-189

鈴木理恵「『遠思楼詩鈔』初編の出版経緯」『書物・出版と社会変容』第20号、査読無、2016年、pp.41-77

鈴木理恵「末田重邨 咸宜園教育の導入」『芸備地方史研究』第300号、査読無、2016年、pp.166-169

鈴木理恵「咸宜園蔵書の形成と管理」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第三部65号、査読無、2016年、pp.194-185

〔学会発表〕（計3件）

鈴木理恵「培養舎の教育活動」中国四国教育学会第69回大会、2017年11月25日、広島女学院大学

鈴木理恵「屏陽義塾の教育活動」中国四国教育学会第68回大会、2016年11月6日、鳴門教育大学

鈴木理恵「咸宜園の蔵書と教育 淡窓時代を中心に」『書物・出版と社会変容』研究会、2015年1月10日、一橋大学

〔図書〕（計1件）

若尾政希、岩坪充雄、鈴木理恵ほか『書物文化とその基底』平凡社、2015年、pp.1-356

〔その他〕（計1件）

鈴木理恵『咸宜園系譜塾の展開に関する実証的研究 西日本を中心として』（研究成果報告書）2018年、pp.1-168

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鈴木 理恵 (SUZUKI RIE)

広島大学・大学院教育学研究科・教授

研究者番号：80216465